

東関東の旅 2019



2019年5月

旅のチカラ研究所 植木圭二

千葉、茨城、栃木の関東地方の東半分を妻とドライブ旅行に行ってきた。今年のGW（ゴールデンウィーク）は10連休だったので観光地は相当混雑したが、反動でその翌週は空いている。今回はそこを狙って旅をしてきた。

■関東の繁栄はここから始まる

東京湾アクアラインから続く館山自動車道を走っている私の車から見える景色は広陵な山ばかり。季節は春、山々は初々しさを感じさせる新緑がとともまぶしい。そんな中を私たちは房総半島を南端に向けて気持ち良いドライブを続けている。

私は関東地方の繁栄は房総半島の南部から始まったと思っている。

関東はかつて関八州と呼ばれており、8つの国（州）があった。相模の国（相州）が神奈川県になったように、ほぼ1つの国が1つの県になったが、千葉県だけは3国が1県になった。それはこの地域に昔は多くの人が住んでおり、行政上細かく分ける必要があったからだ。

房総半島の南端に西国の阿波から船で渡って来た人たちが、同じ発音の安房（あわ）の国を作ったという。その安房から北に向かって上総（かずさ）、下総（しもふさ）と呼ばれるのは南の方から栄えていったことを意味している。

日本の旧国名に備前、備後や越前、越中、越後そして上野、下野というように前後や上下が使われているが、その順番は都（現在の京都）から近い方が前や上になっている。

江戸時代後半に滝沢馬琴が書いた長編小説「南総里見八犬伝」は南総、つまり安房に始まる。

そのストーリーは奇想天外で、南総の里見家の娘と飼い犬の間に生まれた8人の若者（八犬士）たちはそれぞれ仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の文字のある玉を持ち、関東の8つの国に散らばって育った。それぞれに特技があり不思議な縁によって導かれて、最終的には8人が里見家に結集して難敵に立ち向かうというものだ。

この画期的な小説が後世の漫画やSFに大きな影響を与えた物語であると同時に、南総が関東で最も栄えていたことを物語っている。

■道の駅 保田小学校

快適なドライブを楽しんでいると「道の駅 保田小学校」という看板が目にとまる。私は思わず「何、これ学校？」と妻に聞く、妻は「寄ってみよう」と即刻返事が返ってくる。

立ち寄ると、ここは廃校になった保田小学校を道の駅として 2015 年にリニューアルさせた施設だと知る。広い校庭は駐車場に、体育館は即売所に、校舎 1 階の教室はカフェや食堂になっており、その食堂では昔ながらの給食も食べられる。さらに音楽室はミニコンサートの会場に、家庭科室は料理教室にと、道の駅以外に地域の交流施設という役目も果たしているから斬新だ。

道の駅なのでまずはトイレに行くが、とても綺麗で最新式なものになっている。私としては昔の小学生用のトイレを内心期待していたのだが、さすがにそれは叶わないようだ。

校舎 2 階の教室は最近流行りの廃校の宿泊が出来るが、リニューアルされて古さを感じない。教室を 2 つに仕切って各々にベッドが 4 台置かれており、適度な広さで清潔感もある。もちろんトイレや洗面は教室には無く、風呂は日帰り入浴施設が道の駅の敷地内にある。



夕食の提供は無いが、ここは保田漁港の近くなので新鮮な魚料理は何処でもありつける。

持ち込みも可能で、仕出し弁当の注文も受け付けており部屋で食べることもできる。酒も持ち込み飲んでも構わないというが、学校の校舎ゆえに防音処置がされておらず、酔っぱらって大きな声を出すと廊下に響き渡るといふから団体で宴会をするには不向きだろう。

素泊まり 4000 円と価格も魅力的で、安房の国は斬新なことを始めたなと感心する。

■千葉は地層

海上自衛隊館山航空基地の直ぐ近くに「赤山地下壕跡」という太平洋戦争末期に掘られた地下壕がある。壕の総延長は約 1.6km、全国的に見ても大規模なものだ。

中に入ると地下トンネルが延々と広がり、よくこんなものを掘ったなと戦争というものを改めて考えてしまうが、私の関心は壁に浮き出た見事な地層断面に向いている。



私の中では千葉といえば地層が有名で、それは最近のニュースでも報じられた。

地球の磁極は北極がN極で南極がS極と呼んでいるが、地軸とは少しずつずれていて長い時間をかけて磁極は移動している。驚くことにNとSの磁極は地球誕生から何回か反転しているという。そして最後に反転したという証拠の地層がここからほど近い千葉県市原市に残っている。

それゆえにその地層が出来た時代をチバニアン（千葉時代）と名付けられようとしていることをニュースで見た。白亜紀、ジュラ紀のように千葉がでてくるのか、これは凄い。

■歴史の缶詰、仁右衛門島

外房に出て、鴨川に仁右衛門島という島がある。千葉県最大の島という触れ込みだが、私は他に千葉県の島を知らない。

日本の島の総数は6000くらい。その中で人が住んでいる島は約400島という。

仁右衛門島にも人が住んでおり、さらにこの島は個人所有の島という極めて珍しい島だ。島主は仁右衛門という名前を代々継いでいて、現在は38代目というから1000年以上の歴史がある。

その仁右衛門島は泳いでも渡れそうな距離にあり、電信柱に架かって電線も海の上を渡っている。島に渡る手漕ぎの渡船は、2人の漕ぎ手があうんの呼吸で船を操るものでちょっと風情がある。この渡船の往復の費用込みで入島料1350円を払って上陸する。

上陸すると鉄筋コンクリート2階建ての古い建物があって、島の説明や展示、土産物を売っている。ここを見る限り、昔この島には相当多くの観光客が訪れて賑わっていたようだ。

ただ今はそうではないようで、暇そうに店番をしているおばさんに見どころを聞くと、順路どおりに歩けば1時間足らずで島内をくまなく見ることが出来ると教えてもらう。

言われたとおりに島内を歩くと句碑がたくさんあって、源頼朝が隠れたという洞窟がある。当時の島主の仁右衛門が平家に追われた頼朝をかくまったと伝えられている。

島のほぼ中央にその島主の家があり、「平野仁右衛門」という表札が掛かっている門をくぐると古い平屋がある。1704年に建てられたと書いてあり、南総里見八犬伝よりも100年以上も前になる。家には現在の仁右衛門さんが住んでおり、一部は公開されている。

庭には皇太子が来島した記念碑があり、刻まれた日付が昭和なので先日退位した平成天皇のことになる。



島の中には絵を描いている人が多い。妻が暇に任せて人数を数えたら16人にもなる。

どうして多くの人が絵を描きに来るのかというと、対岸の大海浜地区は風光明媚な海岸に魅せられてたくさんの画家が絵を描くために訪れたという。旅館「江澤館」は有名な安井曾太郎が代表作「外房風景」を描いた場所で、この地域全体が絵を志す人たちのメッカになっている。

対岸から見える風光明媚な海岸ということは、この仁右衛門島のことになる。

帰りの渡船で、船頭に「この島に住んでいるの？」と聞いてみると、船頭 2 人とも「ワシらは通いで、住んでいるのは島主ひとりだよ」と言う。私は「ひとり、では跡継ぎは？」と聞き返すが、後継者について彼らの回答は歯切れの悪いものだった。

この島で少なくとも 3 人が働いているが、39 代目つまり次の雇い主は決まっていならしい。

この島は歴史を閉じ込めている缶詰のようで、遠い昔から現在までの生活や歴史の栄枯盛衰が詰まっている。そもそも島とはそういう側面があるが、この島は特にそれが強い。それは先祖代々一貫して島主が島を守り、関東で最初に栄え始めた安房だからだろう。

■日本で一番人気のある国民宿舎

今夜の宿、茨城県日立市の国民宿舎「鷗の岬」に到着する。この宿は日本で一番人気がある国民宿舎ということで滅多に予約が取れない。何が日本一かということ 91 ある公営国民宿舎で客室稼働率がトップ、90%近い数字を維持しており、20 年以上もずっと第一位というから凄い。

客室稼働率の全国平均は旅館が 39%、リゾートホテルで 58%というからその凄さが良く分かる。そんな人気宿なので普段は予約が取れないが、GW 明けの平日ということで予約が取れた。

国民宿舎というと四角い殺風景な建物を想像するが、8 階建てのこの宿は曲線を基調に斬新なデザインをしており、ちょっと例えようがない形をしている。広い敷地には 8 階建ての建物以外に丸いレストランや多目的ホールといったお洒落な外観をした付属施設もある。



建物に入るとフロントもロビーもとても明るくて広い。解放感は抜群で、やはり私の持っている国民宿舎のイメージとは程遠い。

受付には男女の若いスタッフが配置されており対応も上品でそつがない。「おもてなし」の教育が徹底しているということが感じられる。



廊下を歩くと手すりが完備されており、木を多く使っているのが特徴的で先日乗った豪華客船クイーン・エリザベスの船内を彷彿させる。

部屋はもちろん綺麗で広い。特に驚くのはバルコニーの床が木製の茶色の高級なスノコになっていて綺麗に清掃されているので、素足のままバルコニーに躊躇なく出られる。鵜の岬という名前前から分かるように岬の先端にある宿なのでオーシャンビューが売りにもなっている。お客がバルコニーに出るといのは至極当たり前で、その配慮はさすがという気がする。

最上階にある展望風呂からの眺望は更に素晴らしい。風呂はもちろん温泉で、サウナを併設しているのでサウナからも同様な眺望が楽しめることは、サウナ好きの私にとってはこの上ない。

確かに「この上ない」だ、最上階だからこの上はない。そうか、そんな意味だったのか。

■予想を超えた食事

食事は別棟の丸いレストランで食べるが、このレストランは天井が高く 360 度に近い眺望で豪華で解放感がある。このようなレストランは私にとってもあまり経験したことがない。

料理は 4 つのコースから選べるようになっており、私たちは品数の少ない一番安いコースを頼んだ。品数が少ないといっても 8 品くらいはある。

一般的にコース料理のグレードをいくつか用意するときに料理長は自信のある料理を何品か選んでそれらを基本のコースにする。あとはそれに 1 品 2 品追加してグレードを上げていくので、基本のコースの料理が最も多くでるので費用も安く抑えられて質も高まる。これが費用対効果、

つまりコストパフォーマンス（コスパ）という言葉の本来の意味だ。最近では「コスパがいい」というのは安いという方だけを強調して使っているが、安くても満足できるレベルにあるというバランスの良さを示している。

さて私たちが食べた一番安いコースは、コスパが大変良かった。これ以上品数が多くなっても食べきれないだろう。残すことは料理人に対して失礼だ。

ついでに書くと各コースには釜飯が付いているが、足りない人のために丸いレストランの中央には豚汁や漬物、ご飯、味噌汁が置いてあって自由におかわりできる。この豚汁は美味かった。



コースは4つあると書いたが、メニューの料理内容を詳しく見ていくと価格の安い方から3つのコースは基本コースをベースにして私の予想通りの追加方式をとっているが、一番高いコースは食材そのものが違う高級食材を使用している所以他の3つコースとは内容が全く異なっている。高級料理を食べたいお客に対応できるようになっている。

これには脱帽するしかない。私が常々旅行記で書いているが、人は計らずして予想を超えたものに遭遇すると感動する。いわゆる「偶然と感動」というもので、逆に予想や期待を下回った場合は「期待と落胆」になる。

感動はするものの値段は基本コースの3倍以上するから、それは覚悟しないとイケない。ただこの宿の価格体系は宿泊と夕食、朝食の費用がそれぞれ分かれているのでわかり易い。

食事を終えて席を立ち、部屋に戻るお客がチラホラでてくる。すると驚くべき光景を目にする。

配膳や片づけ作業をしているウエイトレスたちが、作業を止めてその立ったお客の方を向いて全員そろってお辞儀をして「ありがとうございました」と声をそろえる。私にとっては初めて見るその光景がとても斬新で印象的だった。

さすがに国民宿舎ナンバーワンを20年以上も続けている宿だ。改めて感心してしまう。

■東海村に見せつけられる

翌朝、車は鵜の岬から茨城県の海岸沿いの国道 245 号線を南下していると広い敷地に立派な建物が立ち並ぶ地域に出る。原子力関連の研究施設、病院、コミュニティセンターも、どれも立派で明らかに今まで走ってきた地域とは異なる。

ここは東海村だと、すぐに理解する。

原子力発電所や関連施設が集中していて、とても村というイメージではない。調べると全国の村で 2 番目に人口が多く、1957 年に原子力の火が灯った日本で最初の場所である。

おそらく迷惑料として潤沢な補助金が出ており、それを村民に還元するのでコミュニティセンターまで立派なものを建てているのだろう。

これらを見せつけられて、私が推奨する長期滞在旅行の候補地リストに入れることにした。

■とにかく広い、ひたち海浜公園

東海村からほど近い国営公園の「ひたち海浜公園」にやってくる。

駐車場は 3 つあり、どこに停めていいのか迷ってしまう。というのはそれらの駐車場の間が半端でない距離で、停める場所によって歩く距離が大幅に変わるという心配をしたからだ。しかし公園をひと回りするなら結局どの駐車場に停めても同じで、その心配は無用になる。

ここはとにかく広い。かつては旧日本陸軍の飛行場で、実は東京ディズニーランド建設候補地にもなったという場所で、広さはその東京ディズニーランドの 7 倍もある。

みはらしの丘に 20 分程歩いて行くと、そこにはネモフィラが綺麗に咲いている。ネモフィラは北アメリカ原産の一年草で和名を瑠璃唐草（るりからくさ）という。

見頃が 4 月中旬～5 月上旬ということでちょっと盛りを過ぎている感があるが、十分に堪能できる。恐らくは先週は一面が青く染まり、空と海の青と溶け合う絶景だったに違いない。



公園内はいろいろな花が咲くので1年を通じて楽しめるようになっている。花がなくても散策だけでも十分に楽しめるようで、大草原、遊園地、大きな噴水の池、森林浴できる小路、古民家、どれをとってもレベルが高い。さすがに国営の公園、潤沢な資金投入が成せる業だ。

結局滞在は3時間にも及び、その間はひたすら歩いていた感がある。本来は丸1日、もしくは2日間滞在してのんびり過ごす公園なのだろう。だから2日間有効の切符も用意されている。



茨城県は都道府県魅力度ランキングで毎年最下位という県であるが、私は決してそうは思っていない。理由はいくつかあるが、国民宿舎や海浜公園はそのことを裏付けてくれた。

気になることは、どれも国や県の力によるもので人々はどう関わっているのだろうか。

■湯西川温泉は儲かっている

日光そして鬼怒川温泉を走り抜け、車は一路、湯西川温泉を目指す。

湯西川と言えば平家の落人の里ということで、平家物語「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理（ことわり）をあらはす」を思い出す。

くしくも昨日行った仁右衛門島は平家に追われた頼朝を助けて、その後に平家は滅ぼされる。そして平家の落ち武者はこの地に逃れてきた。

山が近くにせまり道はだんだん細くなってきて、秘湯の雰囲気がしてくる。東武鉄道湯西川駅を過ぎて20分くらい走った頃に民家がいくつも見えてくる。民家は全て新しく大きい。それらに混じってレストランや観光施設も目に入ってきて、新しい街を感じる。

湯西川温泉に入ってきたのは何となく理解するが、この風景はあまり想像していなかったのが驚いてしまう。私が湯西川温泉に来るのはこれが初めてではないが、以前来たのは10年くらい前で、雪の降りしきる真冬に宿の直行バスで来たのであまり周囲は見えていなかった。

この温泉地は儲かっていると、私の中では直感的に理解する。

平家は落人から見事に復活したのだろうか。

■「平家の庄」も38代目

本日の宿は湯西川温泉「平家の庄」、2014年にテレビ東京の「出没！アド街ック天国」人気温泉宿第1位に選ばれたという触れ込みに反応して予約した。まあ、宿泊費が驚くほど安かったという方が大きいかもしれない。安い理由は連休明けでお客が減るのを見越しての対策なのだろう。

1718年創業というので、相当に古い宿を想像しており、館主は平家の流れをくむ38代目だという。38代目とは、仁右衛門島の島主と同じだ。

駐車場に到着すると若い男性従業員が私たちの車までやって来て、名前を言うと荷物を持って先導してくれる。建物の前には茅葺屋根の門があり門の両側には仁王像が配置されている。門はわざわざ作ったようで新しいが、いかにも平家の落人という雰囲気がある。

その門をくぐると建物の入口に「桓武平氏ゆかり宿 平家の庄」と書かれた大きな看板の下に天狗の面が3つあり、天狗の面の下を抜けて薄暗いロビーの奥に受付がある。案内の従業員はロビーの一角にあるベンチに私たちの荷物を置くと「植木さん、ご到着です」と声を掛けて業務をフロント受付に引き継ぐ。

フロントには責任者クラスの年配の男性がいて、あらかじめ印刷してある住所や予約内容に間違いはないかだけ確認して館内の説明を受ける。だから宿帳への記帳という作業を必要としない。

その後に部屋まで案内してくれるのは若い外国人女性従業員で、それは外国人客に対して安心感を与える。彼女から大浴場や食堂の場所など説明を受けながら館内を歩いていく。

風呂は大浴場以外に、野外にある小屋を仕切った小さな貸し切り露天風呂が6つもある。これも最近の温泉旅館のトレンドで、宿選びの重要な要因になっている。

古いタンスなどの調度品、日本的な民芸品、天狗の面があちらこちらに配置されている。全体的にも古民家らしく木の床、壁は土壁になっていて全ての照明はランプなので全体的には薄暗い。



しかしよく見るとランプはランプの形をした電灯で、土壁は土壁風の壁紙、木の床もフローリングシートなので本当に古いのではなく、古く見せようと近年リフォームしたようだ。

エレベータで4階に上がる。何気なく乗ったエレベータだが、よく考えると古民家ならばエレベータがあるのはおかしい。エレベータも内装に古い木戸を配したものになっている。

通された部屋の中も古民家の雰囲気だが、LED照明やエアコンが埋め込まれており、あくまでも古民家風の部屋に仕上がっていると言った方がいい。

レトロ風に上手にリフォームしていることについては、私はむしろこのリフォームを設計したデザイナーや施工したリフォーム業者を褒めたい気持ちが強くなってきた。

早速大浴場に行き、まずは温泉を堪能する。内湯の壁には「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり・・・」と木の壁に墨で大きく書かれており、いい雰囲気を出している。

露天風呂は湯西川を見下ろす位置にあり、川の向こうには新緑の山々が見えて実に気持ち良い。露天風呂の直ぐ近くには紅葉の木があり、照明設備があるので夜もライトアップされた木々を見ながらの入浴で気持ちよさそう。特に秋の紅葉の時期は最高だろう。

温泉の成分表を見つける。その成分よりも目に付いたのは宿の名前が「観光ホテル亀屋」になっていることだ。この宿はリフォームをする前はそういう名前だったのか。恐らく一大決心をして観光ホテルを古民家風に改装したのだろう。そしてテレビでも注目される宿になった。

館内の雰囲気は那須の「北温泉旅館」に似ている。北温泉旅館は映画「テルマエ・ロマエ」にも登場した古い旅館で大きな天狗の面で有名だ。

従業員の仕事の受け持ち分担やフロントの対応、外国人従業員が説明案内するというこの一連の受け入れシステムは昨年泊まった「星野リゾート青森屋」に似ている。

若い女性やカップル、外国人をターゲットにしているならば、これはこれで受けるだろう。

私は会社員時代の最後の頃は経営品質という仕事をしていた。それは会社をどのように経営革新して企業価値を高めるかというもので、今の私の経営や物事への考え方に大いに役立っている。

その観点から見ると、この宿はお客のターゲットを絞り、他の旅館の良いところを積極的に取り入れ、閑散期には臨機応変に価格対応をする。企業経営としては良さそうな気がするが、私の中に何か引っかかるものが残ってしまう。

レトロ風の造りは、新宿や渋谷の飲み屋ならともかく、はるばる栃木の山奥まで足を運んでくる旅人がどう思うのだろうか。

さらに国民宿舎鶴の岬と比べてしまうが、これで平家は本当に復活したことになるのだろうか。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉に行った時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合いながらも最終的に温泉や宿を評価して数値化する。

評価項目は、温泉については泉質と風呂（湯船や湯殿）に分かれている。費用が高くて良いのは当たり前ということでコスパや、料理、秘湯度なども評価する。

評価は基本 5 段階の主観評価で、各委員の平均値を算出する。

国民宿舎「鶴の岬」の評価結果は、泉質 3、風呂 4、料理 4.5、コスパ 4、秘湯度 3、サービス 5、建物・部屋 5 で総合点は 4.07 になった。

過去の他のデータと比較すると 4.07 は悪くはないが、鶴の岬は秘湯ではないのでこの項目を除外すると 4.25 になる。サービス、建物が 5 というのは今まであまり見たことがない高い評価だ。

湯西川温泉「平家の庄」の評価結果は、泉質 4、風呂 4、料理 3、コスパ 5、秘湯度 4、サービス 4、建物・部屋 3 で総合点は 3.86 になった。

■ついでに群馬

ついでというと群馬に失礼だが、所用があったので私の故郷の群馬県桐生市に立ち寄る。そして「しろきや食堂」というレトロな食堂に入る。



この食堂は数日前にテレビを見ていたら登場した店で、大食い選手権の女王がやって来て大食いによってシャッター通り商店街を元気にするという番組企画だった。

その中では大食い女王が美味しそうにカツカレーを食べていたので、私も迷わずカツカレーを注文する。そして味は結構いける。

番組の中で大食い女王がペロリと10皿以上のカツカレーを食べていたが、それに間に合うように作るのが大変だったと店主から聞く。とにかく凄い速さで大量に食べるのには驚いたという。

本日もこの店は私が注文してからカツを揚げており、カツにサクサク感があって美味しい。恐らくは収録当日も、その都度カツを揚げていたに違いない。それが店主のこだわりなのだろう。

店主のこだわりは店の隅々にも感じられる。壁いっぱい貼ってあるメニューはカレーを中心とした洋食でいわゆる昔の洋食屋さんだ。店内は懐かしい昭和の香りがたつぷりと漂っており、レトロそのものだ。ただ夫婦二人で切りまわすこの店に後継者はいないという。

シャッター通りの他の店も業種は様々だろうが、きっとレトロながらもしっかりとした仕事をしているのだろう。シャッターを下ろさざるえない理由は色々あるかと思うが、お客がたくさん来て儲かってさえいれば店は存続する。いや存続させないといけない、何故ならばお客が多いというのは社会がその店を必要としているからだ。されば後継者として子供以外に継ぐ人も出てこよう。

平家の落人の宿はレトロ風にして復活したが、本物のレトロはシャッターを下ろしてしまうのか。

何故か私は、道の駅になった保田小学校を思い出した。あの小学校自体も第二の人生をスタートさせて、あの中の何店舗かはきっと近くの店が出店したもので地域交流の拠点になっている。

シャッター下ろさずに形を変えて店を継続できるかもしれない。そうすれば店の技術やノウハウを引き継ぐ絶好の場になる。

しろきや食堂のメニューにはソースカツ丼もあり、自称ソースカツ丼評論家の私の血が騒ぐ。今回は是非ソースカツ丼を食してみたい。

■おまけの埼玉

おまけとは、埼玉にも失礼な話だが、帰路の途中に埼玉県深谷市に立ち寄る。新しい1万円札の顔になる渋沢栄一という人物を知りたく、彼の生まれた深谷にある「渋沢栄一記念館」を訪れる。2階建ての立派な記念館は、今が旬なので来館者は多い。

私たち夫婦は帰省の度に深谷を通過していたが渋沢栄一という人物をあまりよく知らない。
「近代日本経済の父」と呼ばれている彼の人生は実に興味深い。



江戸時代末期、当時の階級制度に憤慨した彼は仲間と倒幕を企てていた。実行直前に説得されて、なぜか今度は徳川慶喜に仕える。

ヨーロッパに渡り近代経済を勉強して明治政府で国家財政の確立に尽力するが、実業界に転進して第一国立銀行はじめ約 500 の会社の設立に関与し日本の経済界の礎をつくった。

記念館の展示で、私が最も注目したのは彼が生涯追い続けた「道徳経済合一」という考え方である。道徳と経済は同等の関係で、どちらかが優先というものではない。ここでいう道徳とは企業の倫理観のことで、企業は利益の追求だけではなく社会正義も事業だと説いている。

それは松下幸之助の経営理念に通じるもので、松下幸之助は経営者としての実践経験からこの理念に行き着いたが、その 50 年も前に渋沢栄一が唱えていたことに驚く。

企業の利益とは社会からの役立ち料だと松下幸之助から私は教わった。そのような役立ち料を継続的にもらえる企業だけが生き残ることができるという。

今回訪問した宿や施設は、果たして役立ち料をもらって生き残ることが出来るのだろうか。私にそれらを見届けろ、という宿題をもらったような気がする。

■旅の記録

実施は 2019 年 5 月 9 日（木）～12 日（日）、4 日間の費用は 2 人分の総額で約 6 万 6000 円になる。3 日目は桐生の友人宅に泊まったために費用は記載していない。詳細を以下に記す。

国民宿舎 鶴の岬	25253 円（2 人分、生ビール 2 杯含む）
平家の庄	11100 円（2 人分）
赤山防空壕入場料	200 円×2
仁右衛門島へ入島料	1350 円×2（渡船代含む）
しろきや食堂	1750 円（カツカレー 900 円、日替わり定食 850 円）
その他飲食費	約 3000 円（2 人分の昼食 2 回、コーヒーなど）
ガソリン代	約 7600 円（走行距離 840km）、
高速道路	14050 円（アクアライン～館山自動車道、圏央道～常磐自動車道、東水戸道～北関東道～日光宇都宮道、関越自動車道～圏央道）